

港区にお住まいの方の意識調査 —身近な人とのつながりと食事に着目して—

石井 大一郎

本稿は、特別推進プロジェクトにおける東京都港区編の研究プロジェクトとして、2010年度に実施したアンケート調査「港区にお住まいの方の意識調査—身近な人とのつながりと食事に着目して—」の分析結果をもとに First Report として整理したものであり、アンケート回答者の希望者に配布した報告書である。なお、本稿は、特別推進プロジェクトメンバーであり、報告書を取りまとめた著者がプロジェクトメンバーを代表して研究所年報に報告するものである。

1. 調査の位置づけと目的

明治学院大学社会学部附属研究所では、数年一度、複数年にわたってさまざまな専門をもつ研究者等が、研究チームをつくり、特別推進プロジェクト研究を実施しています。2010～2011年度は、「現代日本の地域社会における〈つながり〉の位相—新しい協働システムの構築にむけて—」をテーマとし、居住構造の転換期を迎える現代日本の典型地域を対象として調査を行いました。

私たちの住む地域社会は、戦後、都市化・郊外化の時代を経て、現在、居住構造の転換期を迎えています。大都市圏の都心部においてはタワーマンション建設に代表される再都市化がみられ、一方で大都市部を離れ地方都市へと向かう人々（UターンやJターン）も現れはじめています。また、過疎地域や地方都市郊外では、高齢化や人口減少が進んでいます。こうした地域では、地域的つながりが弱いこと、スーパーなどの撤退による食材や日用品の調達の不便さなど、安心した暮らしを続けること自体が難しくなっています。

都市化を戦前に経験した明治学院大学白金キャンパスのある港区の居住地域はどのようになっているのでしょうか。本調査では、港区にお住まいの方の普段の生活について、なかでも、これからの暮らしにおいて特に重要となる「つながり」や「食」について、その実態を生活者の視点から明らかにすることを目的とし、アンケート調査を行いました。

2. 調査の方法

本調査は、東京都港区の5つの行政区のうち人口密度が高い高輪支所エリアを含む、配達地域指定ゆうメールの高輪支店配達エリアにおいて、「町」で層化し、「丁目」をランダムサンプリングして抽出した表1にある町丁を対象としてアンケート調査を行いました（表1）。

3. 調査結果の概要

「つながり」と「食」に注目した本アンケート調査の回答から次のようなことがわかります。

私たちの暮らしにおいて、最も基本となるつながりである「住まいをともにする人」につい

表 1 調査全体概要

| | | | |
|--------|---|---|--|
| 調査全体概要 | 配布・回収時期 | ○配布 2010年11月15日 | ○回収 2010年12月25日 |
| | 調査の方法 ～配布と回収 | ○配布 郵便事業株式会社による「配達地域指定ゆうメール」により、指定した配達地域の全戸に送付 ○回収 郵送回収 | 調査母集団： 東京都港区の5つの行政区のうち人口密度が高い高輪支所エリアを含む、配達地域指定ゆうメール（※1）の高輪支店配達エリアを対象とし、「町」で層化し、「丁目」をランダムサンプリングした。 |
| | 配達総数と回収率 | ランダムサンプリングによる抽出された町丁： 芝5丁目、白金台5丁目、白金台3丁目、白金2丁目、白金1丁目、三田3丁目、三田2丁目、高輪3丁目、高輪1丁目、港南4丁目、港南1丁目 | |
| | ○配達総数 配達地域指定ゆうメールの配達総数（事業所等を含む） 22014 ・有効回収票数 2660 ・総世帯数 21430 ※2010年11月1日（配布月）住民基本台帳 ○回収率 12.4% (2660/21430) ○本分析対象有効票数 2527 ※対象地以外の回収票が含まれていたため、それらを除いた票数 | | |

※配達地域指定ゆうメール

宛名（住所・個人名等）を記載しない郵便物を、希望の地域の郵便受箱又は、郵便差入口に配達を行う郵便事業株式会社によるサービスです。配達地域は町・丁目・字名の単位から指定できます。

ては、「ひとり暮らし」の方がもっとも多く全体の34.7%となっています。また子どもと暮らしている人は、31.5%となっています。親と暮らしている人は少なく4.7%となっています。

また、次に社会参加の一つであり、自発的なつながりの場である「団体や組織への参加」については、「趣味・おけいごなどのサークルや団体」に参加している人が最も多く40%近い人が参加しています。地域によって差はありましたが、「自治会・町内会」に参加している人も多く、全体で30%を超えています。自治会・町内会は、身近なつながりの機会をもつことのできる、貴重な参加の場となっていることが推察されます。

「悩みやグチを話せる方的人数」については、非高齢者（65歳未満）、前期高齢者（65歳以上75歳未満）、後期高齢者（75歳以上85歳未満）別にみると、非高齢者が4.5人、前期高齢者が5.0人、後期高齢者が4.5人です。前期高齢者に比べ

後期高齢者が少なくなっています。高齢化するほど、見守り活動や身近な相談相手を見つけるなどの取組が重要になることが改めてわかります。また「地域の困りごと」を聞いた設問では、「近所づきあいが無い」と答える人が非高齢者、前期高齢者、後期高齢者を問わず非常に多くなっています。

地域の特性や世代によって異なりますが、今後、身近なところに“つながりをもてる場や機会”をつくり出していくことの重要性が改めて示された結果と言えるでしょう。

「食」に関する設問では、生鮮食品の買い物は、90%の人が「スーパー」で買い物をしています。八百屋など「個人商店」で買い物をしている人は20%以下です。また「配達サービス」を利用している人は約15%です。「買い物に行く頻度」を聞いた設問では、「週3回以上」が全

港区にお住まいの方の意識調査

体の66%です。多くの人がスーパーへ頻繁に買い物に出かけている様子がうかがえます。

高齢期における健康状態を良好に保つためには、毎日、多様な食品を摂取することが必要であると言われています。どの程度の品目の食品群を摂取しているか尋ねたのが「食の多様性」についての設問です。分析の結果、高齢な方ほど食の多様性が低くなっていました。

このことは、高齢な方ほど食の多様性が低く、低栄養になりやすい状況にあることを示すため、高齢者が食材を調達しやすい環境をつくること、食品数を数多く摂れるようにすることが重要であることがわかります。

4. 回答者の基本属性

4-1. 年齢と性別

回答者の年齢は、20代と80代以上の回答が少なくなっています(図1)。港区の実際の人口構造と比較してみると20~30代の回答者が少なくなっています。本分析は、全体で結果をみる場合には、若年層の影響を小さく表していることに留意が必要です。また、性別については、男性が37.1%で女性が62.9%となっています(図2)。男性についての影響を小さく表していることに留意が必要です。

次頁図は、2005年の国勢調査データをもとに作成した人口ピラミッドです。25歳~44歳までの人口が多くなっています。また55歳~59歳の人口も多くなっています。特に25歳~34歳では、女性が男性に比べて多くなっているのが特徴です。

なお、港区では1995年以降、都心回帰がみられ、人口が増えています。

4-2. 現在のお住まい

現在のお住まいについては、回収数では高輪1・3丁目他に比べて多くなっています。分析結果に大きく影響している可能性があること

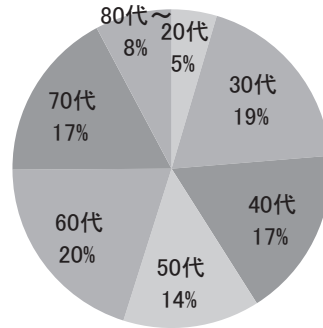


図1 年齢 [n =2506]

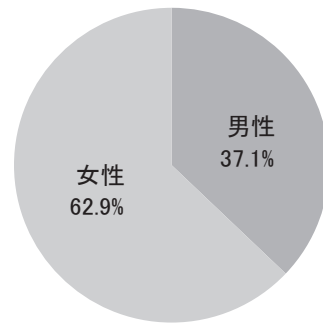


図2 性別 [n =2512]

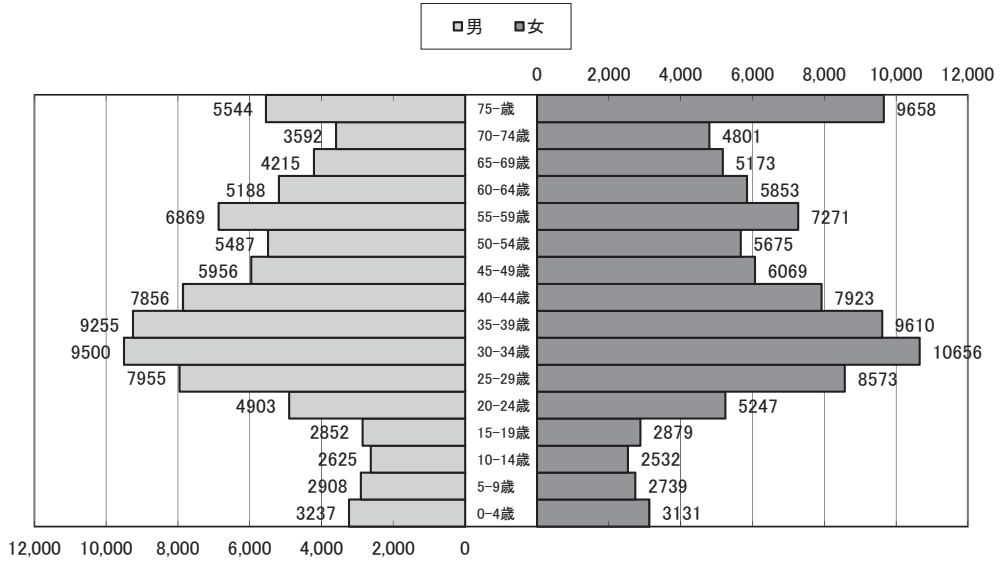
に留意が必要です。港区の実際の世帯数(2011年11月1日時点 住民基本台帳)を母数として回収率を見てみると白金1・2丁目と港南1・4丁目の回収率が少なくなっています。

白金1・2丁目は、古くからの町工場や戸建住宅が多くある地区で、港南1・4丁目は、新しい大規模マンションが立ち並んでいる地区です。

4-3. 居住年数

現在の住まいの居住年数をみると、約4人に1人は2年未満となっています。一方で、20年以上という人も4人に1人以上となっています。次に、港区居住年数をみると約4割の人が20年以上となっています(図3)。

また、それぞれの中央値をみると現在の住まいの居住年数の中央値は8.0年(平均は15.3年)、港区の居住年数の中央値は11.0年(平均は21.34年)となっています。



参考 港区人口ピラミッド
(2005年国勢調査より作成)

表2 現在の住まい

| 町名 | 回収数 | 世帯数 | 回収率 (%) |
|----------|------|-------|---------|
| 芝5丁目 | 331 | 1993 | 16.6% |
| 白金台3・5丁目 | 360 | 2626 | 13.7% |
| 白金1・2丁目 | 328 | 3533 | 9.3% |
| 三田2・3丁目 | 310 | 2774 | 11.2% |
| 高輪1・3丁目 | 823 | 5580 | 14.7% |
| 港南1・4丁目 | 375 | 4924 | 7.6% |
| 合計 | 2527 | 21430 | 11.8% |

(年数は、3年8ヶ月の場合は3年、一年未満の場合は0年で集計しています。)

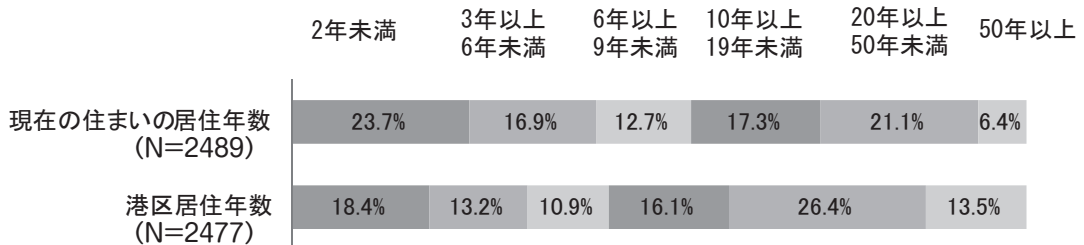


図3 居住年数

5. 転居前の居住地、居住継続意向、住まい

5-1. 現在のお住まいに転居してくる前の居住地

出生地と直前の居住地に関して、2つのグラフ(図4)から、「神奈川県・千葉県・埼玉県」や「その他の日本国内」で出生して、「港区内」や「東京都23区内」に居住し、その後、現在の住まいに移り住んだ人が多いことが推察されます。

なお、「生まれてからずっと現在の住まい」については、直前の居住地を聞いた設問にのみ選択肢を用意したため、出生地のグラフには表れていません。

5-2. 現在の居住地を選んだ理由
(複数回答可)

現在の居住地を選んだ理由の上位2つは、「交通の便がよいから」「勤務地が近いから」といった利便性に関するもので、他に比べても非常に多くの方が、居住地を選んだ理由として挙げています。次に「一般的にイメージがよい場所だと思うから」「公園や緑地が近くにあり気持ちのよい環境だから」といった環境面に関するものが多くなっています(図5)。

また、居住地を選んだ理由を主成分分析*を用いて分析すると、回答者は、次の5つのタイプに分類されます。利便性だけを重視しているわけではないことがわかります。

- ① 利便性を重視するタイプ
- ② 以前から住んでいるタイプ
- ③ 子育て環境・施策を重視するタイプ
- ④ 繁華街や文化施設のアクセスを重視するタイプ
- ⑤ 親との近居を重視するタイプ

*主成分分析とは、多くの変量の値(本設問ではその他を除き17つ)を少数個の総合的指標(主成分)で代表させる分析の方法です。

5-3. 居住の継続意向

居住の継続意向については、「ぜひそうしたい」「できればそうしたい」を合わせると90%以上の人がこれからもずっとこの町に住んでいきたいと考えていることがわかりました(図6)。

また、高齢になるほどこの割合は増えること

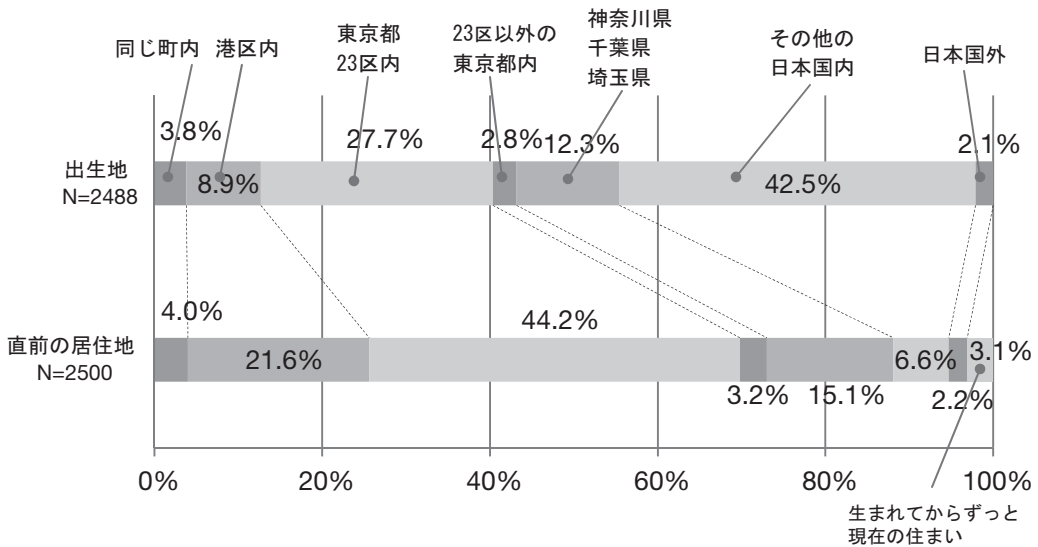


図4 出生地・直前の居住地

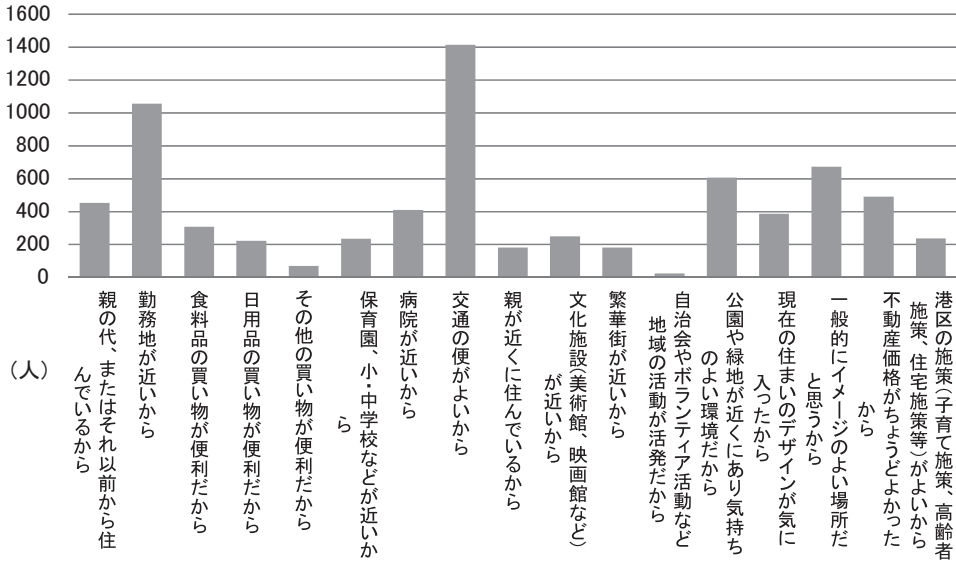


図5 居住地を選んだ理由

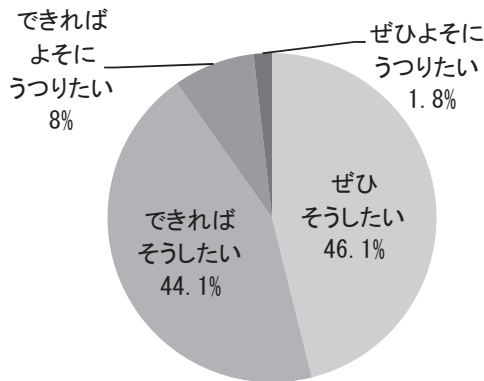


図6 居住の継続意向

がわかりました。

5-4. 現在のお住まい

住まいに関しては、一戸建て、分譲マンションを合わせると約半数以上の方が持ち家でした。

多くの回答者がいた「持ち家(一戸建て)」「持ち家(分譲マンション)」「民間の賃貸マンション・アパート」「都営の賃貸住宅」と、6の居住の継続意向とクロス集計を行いました。「ぜひ そうしたい」と答える人に着目すると、持ち家(一戸建て)が最も継続意向が高く、都営

の賃貸住宅が次に高くなりました(図7、図8)。

また、住まいの広さについては中央値が65.0㎡(最大値2727.0㎡、最小値3.0㎡)でした。

5-5. いっしょに暮らしている方(お住まいをともにしている方)

いっしょに暮らしている方については、ひとり暮らしの方が最も多い結果となりました。

- 子どもと暮らしている方の割合 31.5%
- 親と暮らしている方の割合 4.7%
- ひとり暮らしの方の割合 34.7%

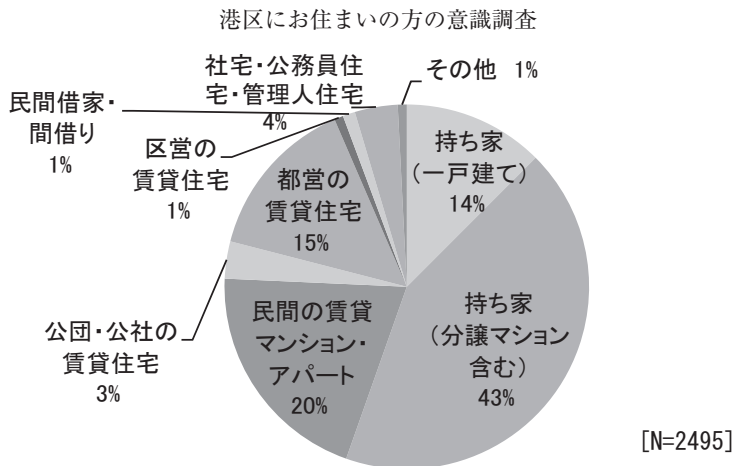


図7 現在の住まいのタイプ

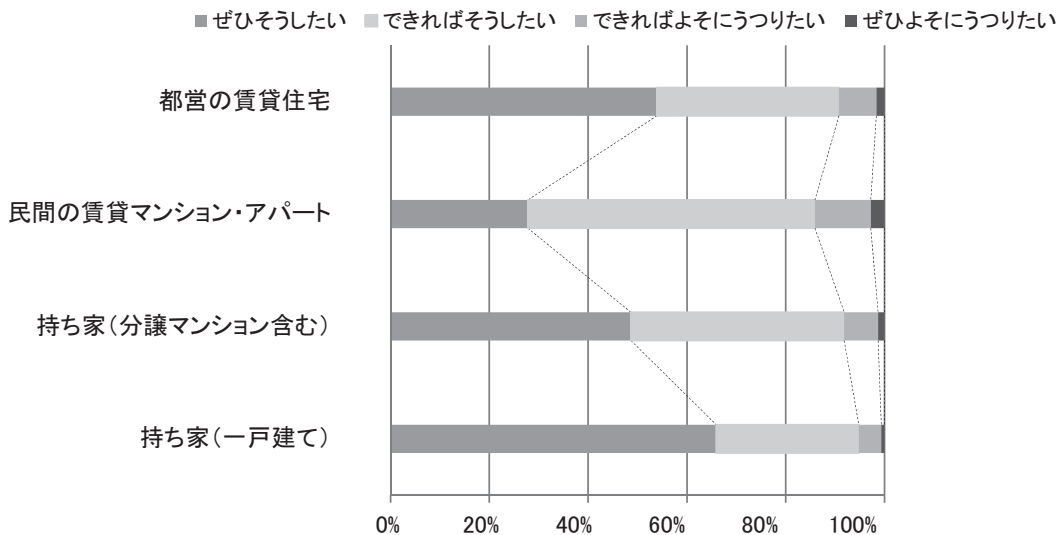


図8 住まいのタイプと居住意向の関係

5-6. 学歴（中退の場合も卒業とします）

学歴は、大卒、大学院卒を合わせると50%を超えています。平成12年（2000年）の国勢調査によると、日本の総人口に占める大学卒業者の割合は20.9%であり、回答者のバラつきはありますが、港区の居住者は高学歴であることが推察されます（図9）。

6. お仕事や通勤、世帯の収入

6-1. あなたの主たるお仕事や勤務先

回答者は、仕事の内容では、管理職、専門職、事務職が多くなっています（図10）。また、仕事における立場では、半数の人が、常勤の職員・社員で、次に会社経営者・役員となっています（図11）。

6-2. 会社の規模（支店や営業所だけでなく会社全体）

会社の規模については、「1000人以上、または

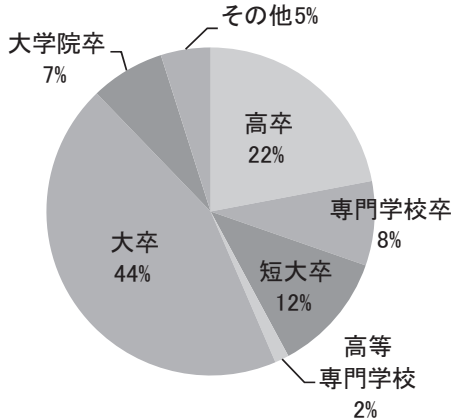


図9 学歴

「官公庁」と答えた人が全体の3分の1であり、次に規模の大きい「100人以上、999人以下」と合わせると半数を超えています (図12)。

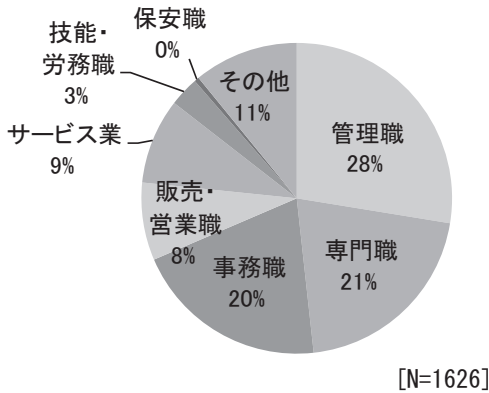


図10 仕事の内容

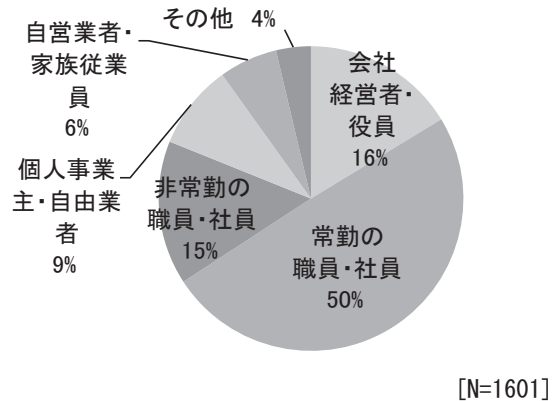
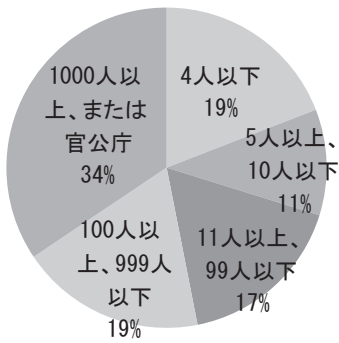


図11 仕事における立場

仕事の内容の分類

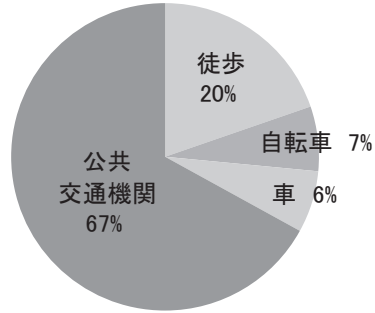
- ・管理職 (会社経営者・役員、課長以上の管理職、駅長、船長など)
- ・専門職 (弁護士、医師、看護師、薬剤師、教員、研究者、建築士、芸術家、クリエイター、記者、スポーツ選手、不動産鑑定士、大使館職員、議員など)
- ・事務職 (総務・企画事務、経理事務など)
- ・販売・営業職 (小売店主・店員、飲食店主・店員、販売店主・店員)
- ・サービス業 (料理人、美容師・理容師、接客業、ヘルパー、アパート管理人、タクシー運転手、施設窓口業務、クリーニング職など)
- ・技能・労務職 (大工・鳶等職人、工場・倉庫作業員、建築作業員、パン・菓子製造者、電気・設備作業員、清掃員、トラック運転手など)
- ・保安職 (警官、自衛官、警備員など)
- ・農林漁業従事者 (農業、養畜、林業、造園業、漁業など)
- ・その他

港区にお住まいの方の意識調査



[N=1495]

図12 会社の規模

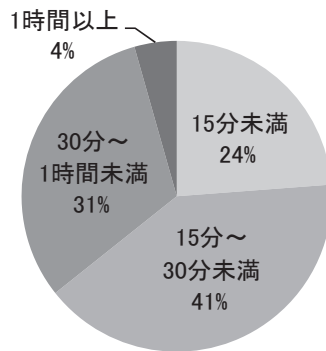


[N=1495]

図13 通勤手段

6-3. あなたのお住まいから仕事場までの通勤手段と時間

通勤手段に関しては、公共交通機関を利用する人が67%と最も多くなっています。徒歩や自転車で通勤する人は、合わせると27%となっています。通勤時間と合わせてみると、15分未満の人が24%おり、比較的近い通勤地へ、徒歩や自転車で通勤していることが伺えます（図13、図14）。



[N=1530]

図14 通勤時間

NHK 放送文化研究所が2010年10月に行った最近の調査では、全国の7000人を対象に行った片道の平均通勤時間は40分であり、地方都市を含むこうした平均と比べても、港区では、通勤時間が短い人が多いことがわかります。

6-4. 世帯全体（共働き等の場合はその合計）の収入

世帯あたりの収入は、300万円未満の世帯が23%でした。一方で1000万円以上の世帯が26%でした。さまざまな収入の世帯がいることがわかります。

なお、総務省統計局が2007年に発表した、1世帯あたりの平均世帯収入（世帯あたりの勤労者数：1.49人）は、7,177,795円となっています。サラリーマンに限定すると6,178,428円となっています。

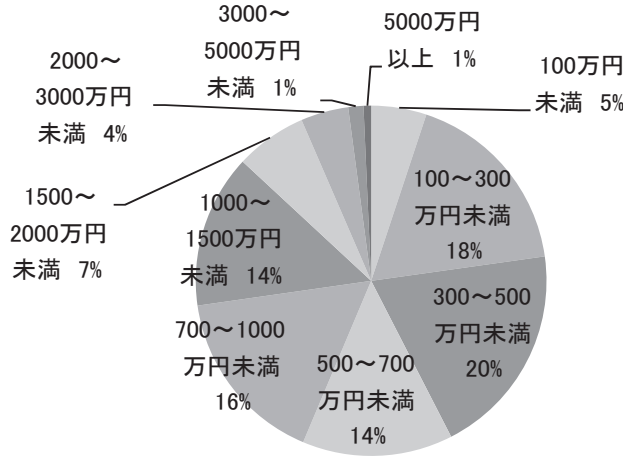
また、地域別にクロス集計を行い、分析結果

をみてみると、300万円未満の収入がもっとも割合で多いのは、芝5丁目地区（回答者のうち、42.3%が300万円未満）となっています。一方で、300万円未満の収入がもっとも割合で少ないのは、白金台3、5丁目地区（回答者のうち、11.4%が300万円未満）となっています。このように地区によって世帯収入に違いがあることがわかります。

7. 団体や組織への参加

7-1. 団体や組織への参加

団体や組織への参加は、主なものの割合を見ても「趣味・おけいごとのサークルや団体」（以下、「趣味」と言う）が最も多く、40%近い人が参加しています。次に多いのが、「自治会・町内会」で、30%を超えています（図16）。



[N=2393]

図15 世帯全体の収入

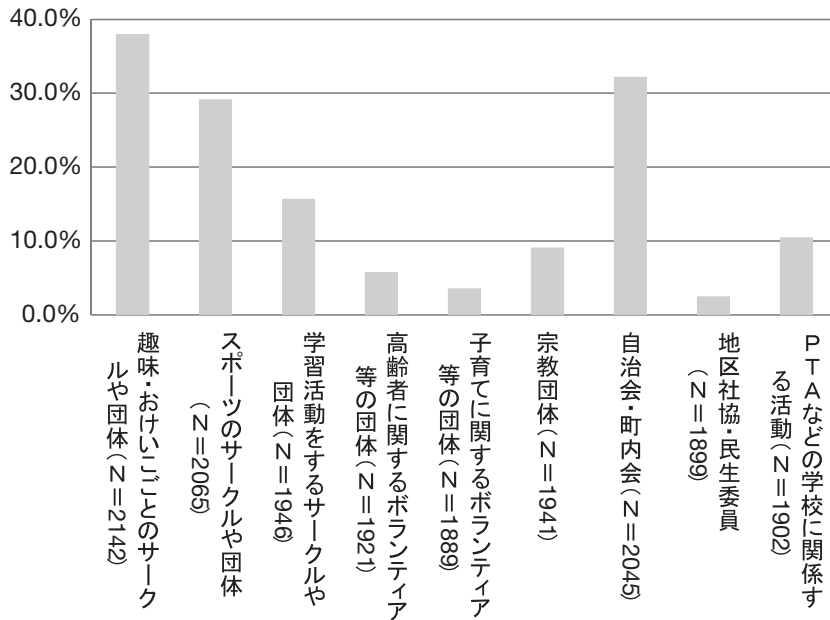


図16 団体や組織への参加

これに「スポーツのサークルや団体」、「学習活動をするサークルや団体」が続きます。ボランティアの団体に参加している人は多くありませんでした。

次に地域別にみると違いがあることがわかります (図17)。「自治会・町内会」と「趣味」へ

の参加の割合をみると、芝は参加の割合が高くなっていますが、白金は参加の割合は低くなっています。

また、芝や港南では「自治会・町内会」への参加が「趣味」より高くなっていますが、他の地区では「趣味」の方が高くなっています。特

港区にお住まいの方の意識調査

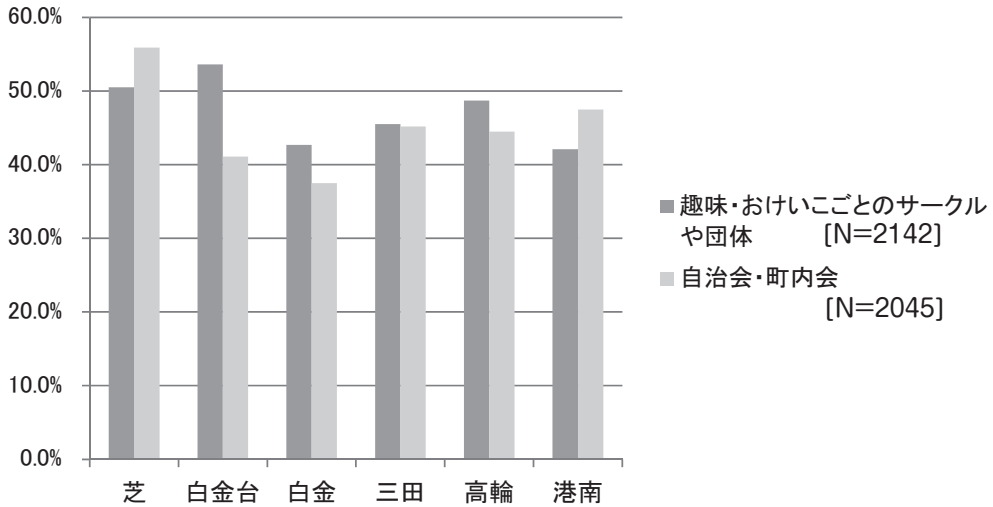


図17 地域別にみた団体や組織への参加

に白金台では、「趣味」への参加の割合が「自治会・町内会」への参加の割合に比べて高くなっているのが特徴的です。

7-2. 活動に参加していない人の理由

参加していない人の20%以上の人が「時間がない」ことを理由に挙げています。続いて「参加のきっかけがない」「自分の興味をひくものがない」「それらの活動を知らない」が多くなっています。「参加のきっかけがない」は2番目に

多くなっていますが、捉えなおせば、参加のきっかけさえあれば、団体や組織へ参加してもよいと考える人が参加していない人の15%以上いるということになります。参加のきっかけづくりが重要であることがわかります（図18）。

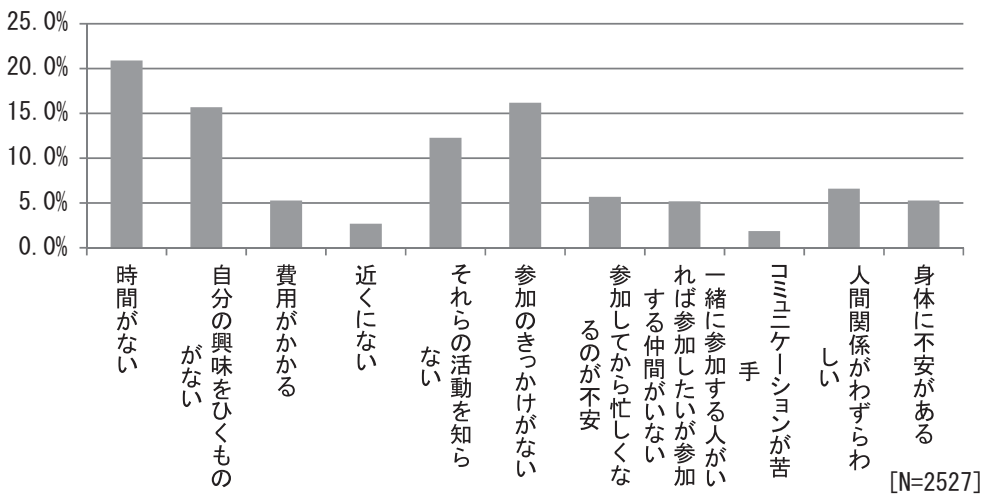


図18 参加しない理由

8. 過去5年間に参加したことのある学習活動

過去5年間に参加したことのある学習活動を、有効回答者のうち、どれくらいの人に参加したかを割合で示したものが図19です。「体育・スポーツ・レクリエーション」(以下「体育」と言う)と「趣味的なもの」が圧倒的に多くなっています。次に「職業上の知能や技能」

「教養的なもの」が続いています。

また、学習活動を行った場所については、個人教授あるいは民間の小規模教室が最も多くなっています(図20)。

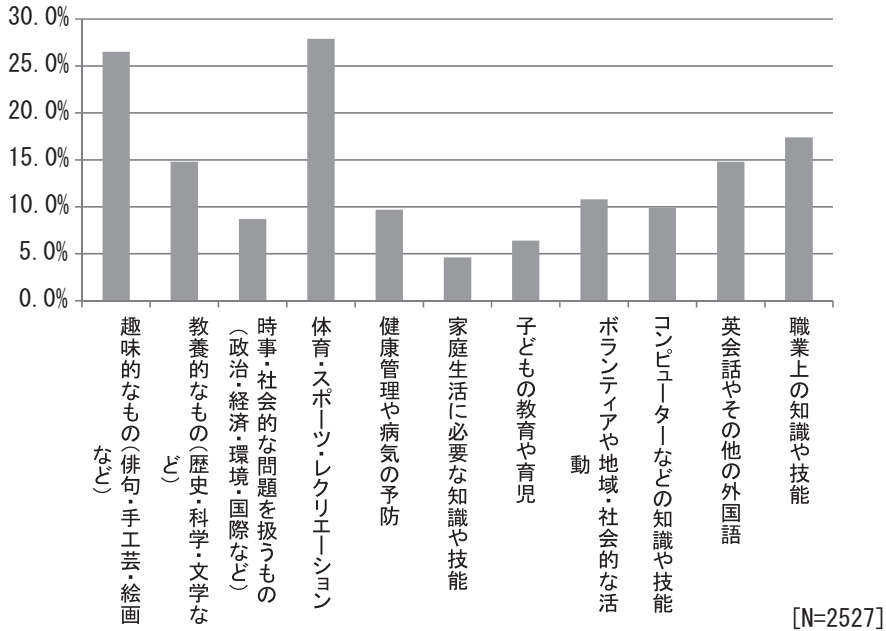


図19 学習活動の内容

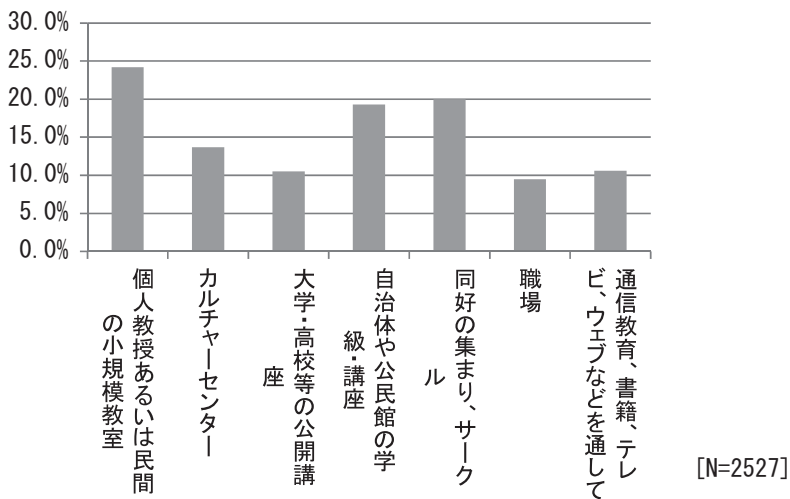


図20 学習活動を行った場所

9. 悩みやグチを話せる方

※話し相手は、インターネット上で知り合って、直接会ったことのない人や、専門家（医師・介護士・保育士・カウンセラーなど）を含みます。

パートナー（配偶者）を含め、悩みやグチを話せる方の人数は、2244人の有効回答数で見ると、中央値4.0人（平均値5.14人）でした。また、非高齢者、前期高齢者、後期高齢者別にみると中央値は、以下のようになっています。前期高齢者で5.0人となりますが、後期高齢者になると3人に減っています。

| | | |
|-------|-----------|------|
| 非高齢者 | ・ ・ ・ ・ ・ | 4.5人 |
| 前期高齢者 | ・ ・ ・ ・ ・ | 5.0人 |
| 後期高齢者 | ・ ・ ・ ・ ・ | 3.0人 |

10. 地域の困りごと

地域の困りごとについては、全回答者について、多い順にみてみると、「ゴミ出しのルールを守らない人がいる」「近所づきあいがいい」「車等の騒音がうるさい」といった環境や近隣との関係に関するものが多く、続いて、買い物等の利便性に関する「近所に日用品など買い物する店がない」「近所に生鮮食品を買う店がない」「近所に外出する店がない」が多くなっています。

世代別にみると、全体とは少し傾向が異なるようです（図21）。非高齢者は、買い物等の利便性に関する「近所に日用品など買い物する店がない」「近所に生鮮食品を買う店がない」「近所に外出する店がない」と答える人の割合が高齢者より高くなっています。また、「ゴミ出しの

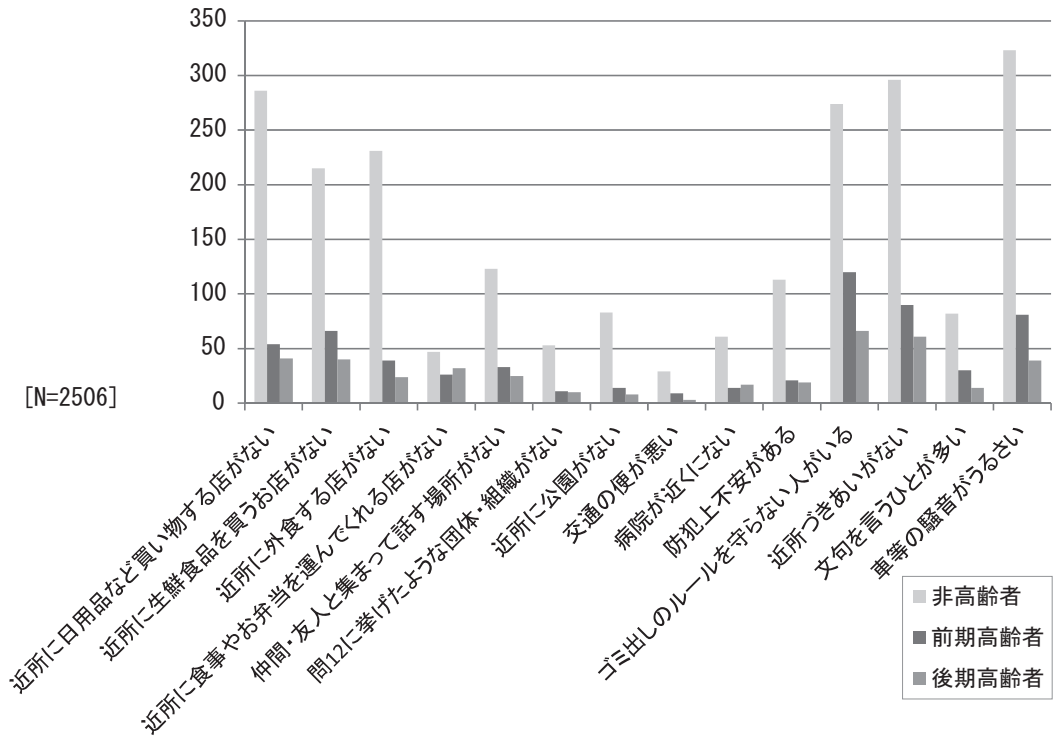


図21 地域の困りごと

ルールを守らない人がいる」は、前期高齢者、後期高齢者では一番多くなっていますが、非高齢者では4番目です。このように、身近な環境面について困りごとがあると答える割合は高齢者で高く、利便性について非高齢者が高いことがわかります。

11. ふだんの食事について

11-1. 食材や食事そのものを買に出かける頻度

食材や食事そのものを買に出かける頻度に

ついては、週3回以上の方が全体の66%を占めています(図22)。

非高齢者、前期高齢者、後期高齢者別に買い物頻度をみると次のような特徴があります(図23参照)。非高齢者は、高齢者に比べると買い物に行く頻度が少なくなっています。高齢者は、特に前期高齢者において、買い物に行く頻度が多くなっています。

11-2. 生鮮食品(野菜・生肉・鮮魚)をどこでよく買うか

生鮮食品の購入場所は、「スーパー」が非常に

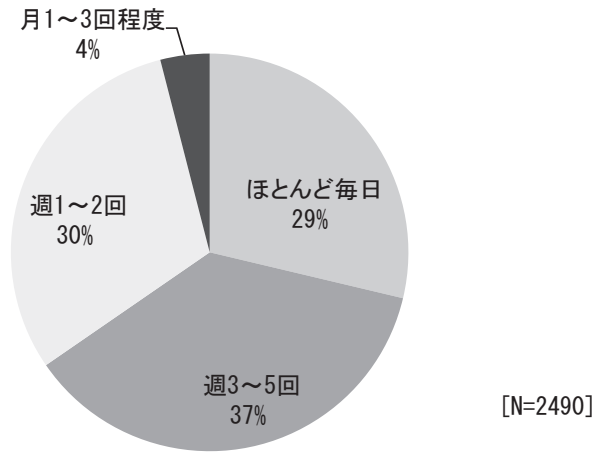


図22 買い物の頻度

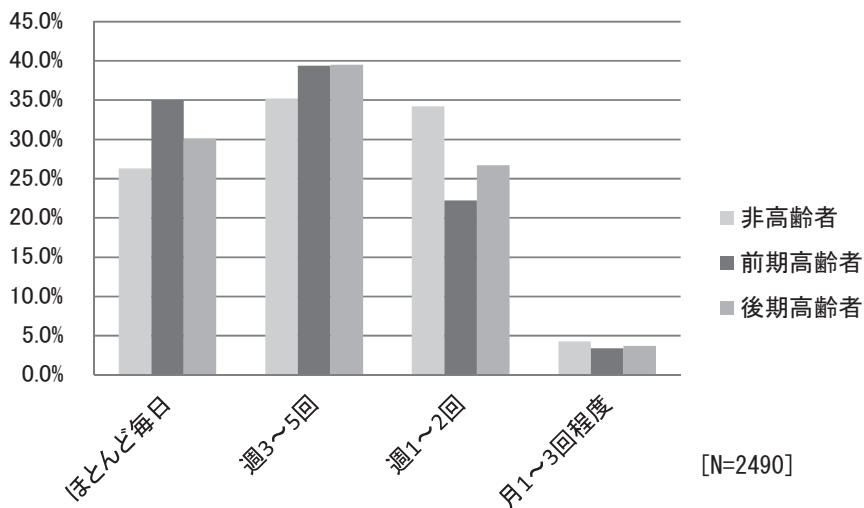


図23 非高齢者・前期高齢者・後期高齢者の買い物の頻度

港区にお住まいの方の意識調査

多くなっています。また、非高齢者と高齢者との差はほとんどみられませんでした（図24）。

11-3. 食の多様性

食生活の悪化は健康被害を引き起こします。低栄養状態になると、貧血や肺炎、脳出欠などのリスクが高まるとともに、運動機能が低下し、「生活自立度の低下」や「要介護度の上昇」を引き起こします。

老年栄養学の専門家（熊谷修ら（※））によると、次のページの「食品群の一覧」に挙げた10

の食品群のうち少なくとも毎日4品目以上摂取していない高齢者は、低栄養状態になる確率が高くなると言われてしています。

食の多様性について、1日に4品目以上を食べた人を「食の多様性高群」といい、3品目以下の人を「食の多様性低群」とし、非高齢者、前期高齢者、後期高齢者別に食の多様性がどのようになっているかをみると、高齢化するほど食の多様性が低くなるということがわかりました。

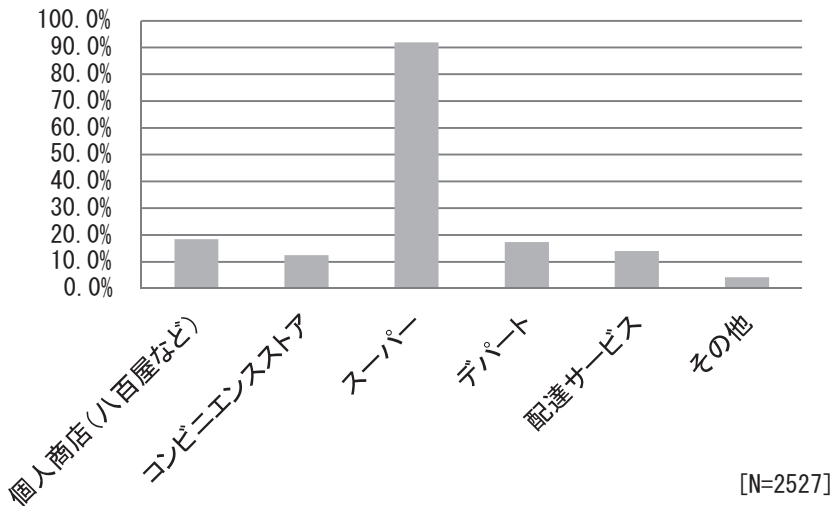


図24 生鮮食品の購入場所

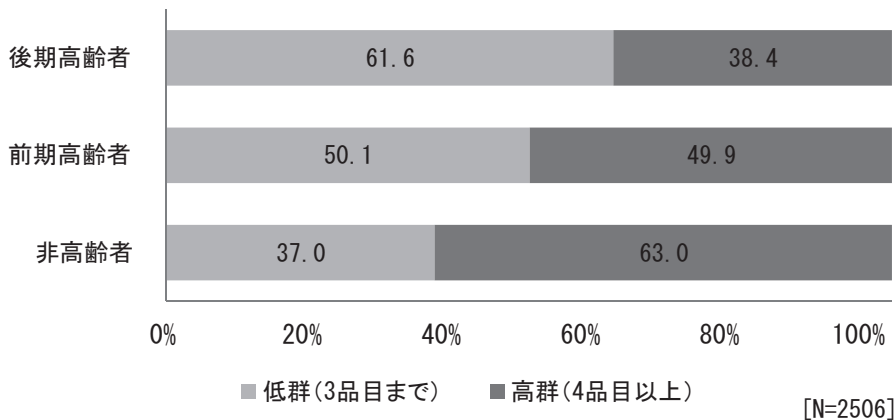


図25 食の多様性

食品群：

- ・魚介類 (生鮮、加工品を問わない) ・肉類 (生鮮、加工品を問わない)
- ・卵 (鶏、うずらなど。魚の卵は含みません) ・牛乳 (コーヒー牛乳は含みません)
- ・大豆、大豆製品 (豆腐、納豆などの食品) ・緑黄色野菜 (人参など色の濃い野菜)
- ・海藻類 (生、乾燥を含みません) ・いも類 ・果物類 (生、缶詰を問いません)
- ・油脂類 (油炒め、天ぷら、バターやマーガリンなどの料理)

※熊谷修監修「低栄養予防ハンドブック」地域ケア政策ネットワーク、2004

12. 抑うつ感・人生満足度

12-1. 1週間の抑うつ感

(1) ゆううつでしたか

この1週間、どの程度「ゆううつであったか」については、非高齢者の方が、ゆううつを感じていることがわかりました。また前期高齢者が最もゆううつを感じていませんでした。また10歳階級ごとにみると、20代～40代など若い世代ほどゆううつを感じていることがわかりました (図26)。

(2) 家族や友人の助けがあっても、ゆううつ感を解消できないと感じましたか

「ゆううつ感を解消できない」と答える割合は、前期高齢者で最も低くなっています。また、非高齢者は、前の設問「ゆううつであった」を感じる割合は、後期高齢者に比べてもかなり高

かったのですが、解消できないと答える人は減っています。つまり、家族や友人の助けにより、ゆううつが解消されることが推察されます (図27)。

(3) 孤独を感じましたか

この1週間、どの程度「孤独を感じたか」については、後期高齢者が最も高い割合を示しています。また、非高齢者は、仕事や家族があり人との関わりは多いと考えられますが、後期高齢者と同様に孤独を感じていることがわかります (図28)。

12-2. 人生満足度

(1) 私の人生は素晴らしいと感じますか

人生の満足度について、「私の人生は素晴らしい」と感じるかを7段階で聞きました。「全くそうだ」「そうだ」「ややそうだ」の割合の高さ

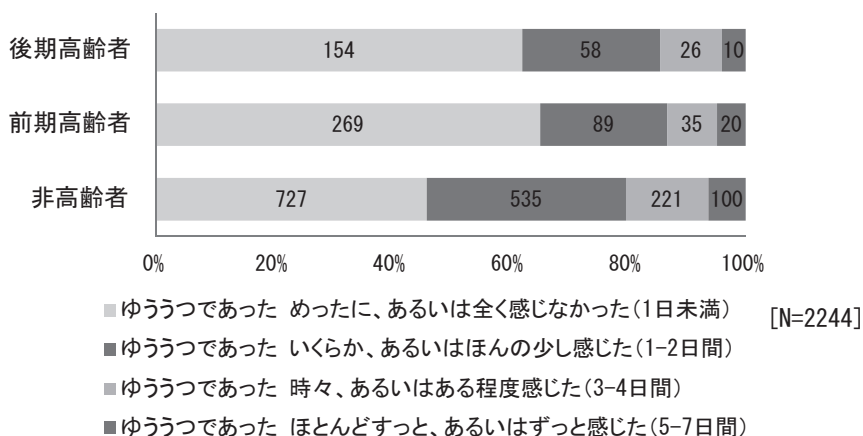


図26 ゆううつ

港区にお住まいの方の意識調査

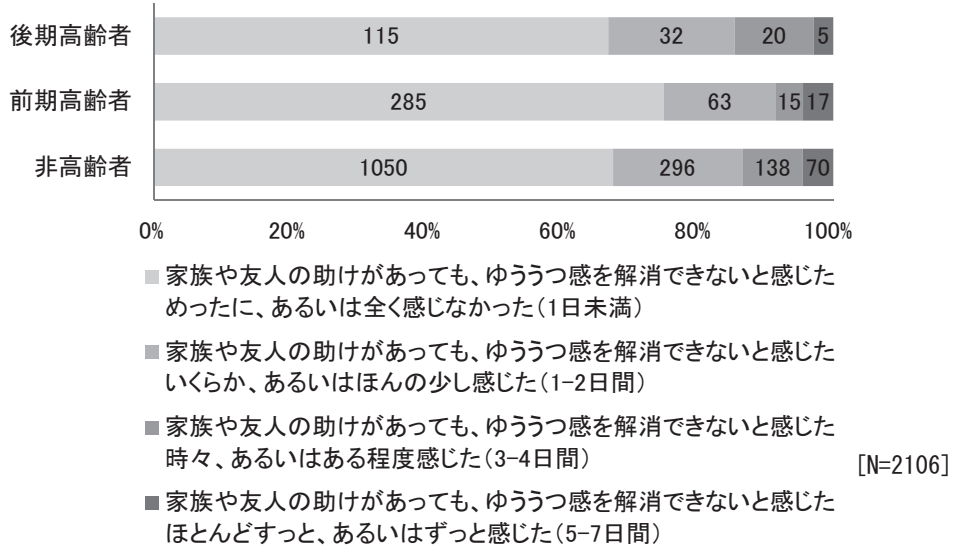


図27 ゆううつを解消できない

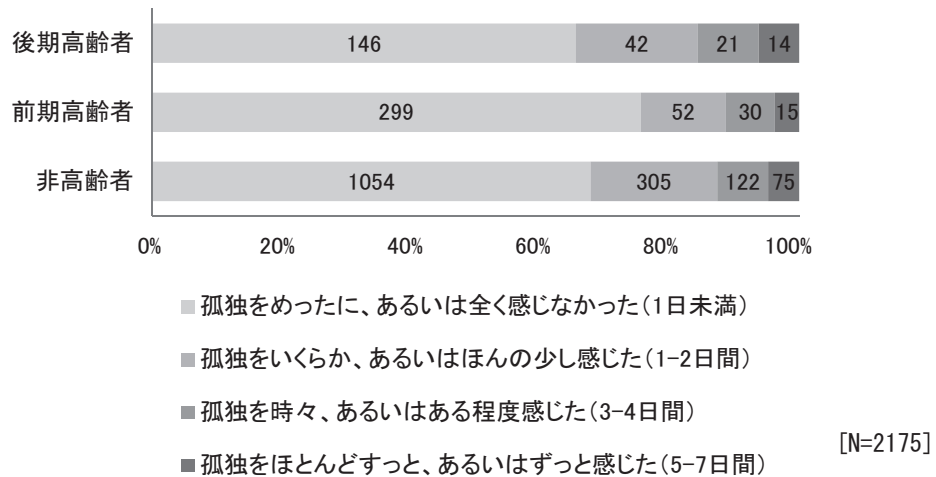


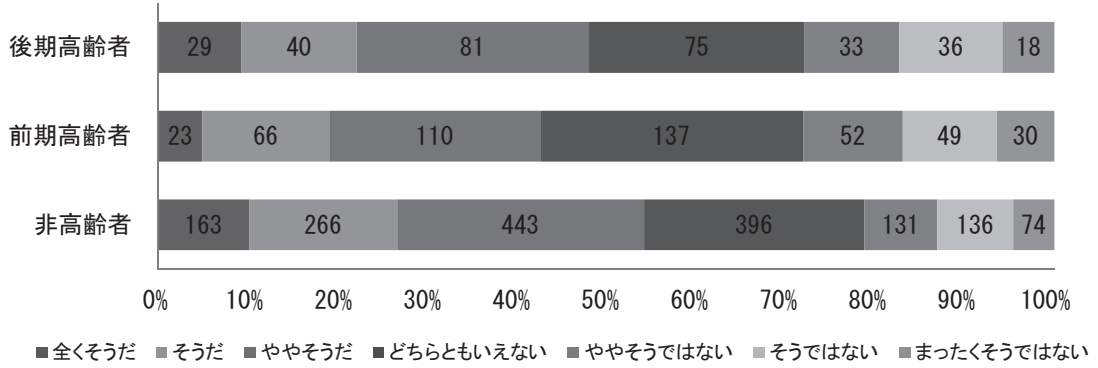
図28 孤独を感じた

を見ると、非高齢者、後期高齢者、前期高齢者の順にすばらしいと感じる割合が高くなっています(図29)。

男女別に、非高齢者、前期高齢者、後期高齢者について、「私の人生はすばらしい」を聞いたものを割合で表したのが図30です。

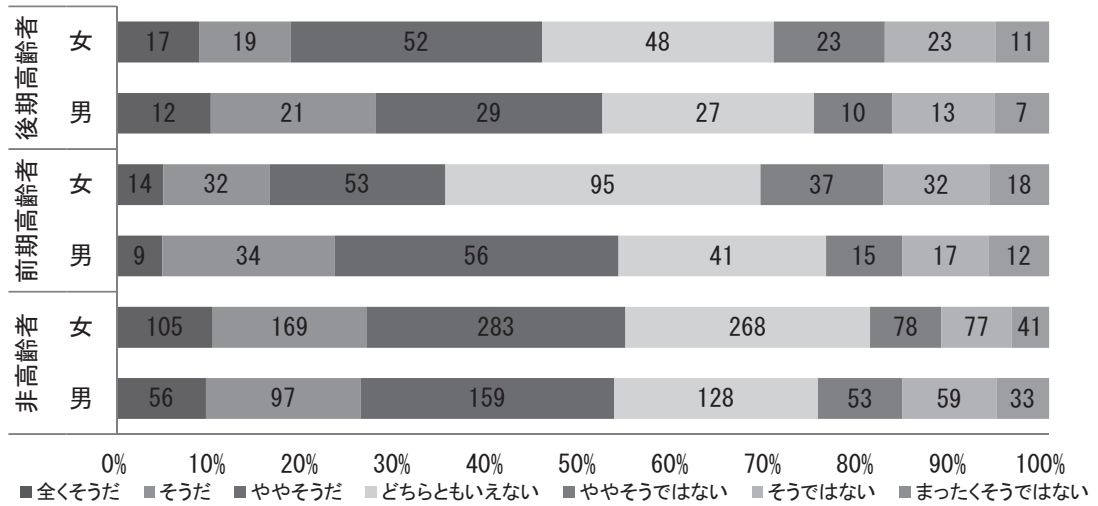
「全くそうだ」「そうだ」「ややそうだ」の割合の高さを見ると、男女の差に特徴がありま

す。非高齢者は、女性の方が満足度は高くなっていますが、高齢者になると、男性の方が満足度は高くなっています。



[N=2388]

図29 私の人生はすばらしい



[N=2388]

図30 男女別私の人生はすばらしい